地球は美しい

まほろ®

［特集］光

Autumn
2001.10
No. 29

私とエコツーリズム——開　梨香

「エコツーリズム」という言葉に出会ったのは七年前のことだ。当時ディスプレイ会社の役員だった私は、西表島に建設予定の施設の打合せで某財団の理事を訪ねた。その日のことは、今でも目に焼きついている。マンガのキャラクターにでもなりそうな個性的な風貌、身振り手振りも半端じゃない。手の平を力いっぱい開いて、目をキラキラと輝かせながら、ものすごい勢いで西表島とエコツーリズムについて語り出した。「エコツーリズム」……この言葉が呪文のように私の頭の中で渦巻いていた。

それはちょうど、内装・展示の仕事にジレンマを感じ始めた矢先のことだった。次々と計画される県内各地の博物館や資料館建設に、調査段階から展示の設計・施工と携わっているにも拘わらず、なぜか空しさが募る。施設は完成してからが勝負である。活かしてくれる人や事業がなければ、どんなにすばらしい施設でも魅力は薄れていく。

大学を卒業後、放送局や企画会社勤務を経て、私は二五歳で結婚した。夫は内装会社を営んでおり、結婚と同時に世界が一変した。会社は大きな赤字を抱えていたのだ。私は経理に営業、現場掃除と何でも手伝った。リゾートホテル、レストランなどの商業施設から住宅まで、さまざまな建物の内装を手がけた。仕事にやりがいはあった。とにかくがむしゃらに働いた。体力的には耐えられたが、お金に追われていると精神的にまいる時がある。息が詰まると私は、東京出張を計画するようになった。

目当ては、長野駅から善光寺を越えて車で三〇分程登った、標高一一〇〇メートルの飯綱高原だ。天の岩戸伝説で有名な戸隠と同じく飯綱山のふもとにあり、白樺、カラマツ林と四季おりおりの花が咲き乱れる美しい高原である。

東京での仕事を早々に終え、夜八時の特急「あずさ」に乗りこむ。もう、外は何も見えない。暗闇の向こうに朝もやにけむる山並みと白樺の林の中で深呼吸をする自分を想い、心が弾む。長い髪を後ろに束ね、ひげをたくわえたみそっ歯のロッジオーナー（園長と呼ばれていた）と、りんごのほっぺをした奥さんが小走りに迎えてくれるだろう……不思議なことに、電車に乗りそう思った瞬間、すでに癒されている私がいた。地元で生まれ、故郷の飯綱を愛す園長は、「自然」といつも友達だった。学生時代、彼に連れられて観た野の花の美しさに息を呑んだ。彼を慕う常連客も多く、時には和やかに、時には情熱的に夜更けまで語り合った。たった数時間の滞在でも、自然や人との触れ合いにやすらぎを求めて、私は飯綱に出かけた。

忙しい日常と飯綱での束の間の休息、そんなことを繰り返しているうち、会社は再建を果たしていた。

赤字解消に小躍りしているところに、大手ディスプレイ会社から合弁会社設立の話が持ち込まれた。すべてが灰燼と化した沖縄戦からの復興を果たし、二七年間の米国統治から日本に復帰して二〇年。基盤整備をほぼ終えた沖縄県が文化行政を宣言した頃だった。時期を得て、会社設立直後から多くの文化施設づくりに携わることができた。わくわくするような仕事が相次いだ。何のために誰を対象とした施設をつくるのか。目的やコンセプトを明確にして、展示ストーリーをつくる。さらに、それを表現するための展示手法を検討する。書物から拾い、研究者やお年寄りから聞いて、地域の歴史や文化、自然を紐解いていく。

それまでも、居住性を追及し、デザインにこだわって建物をつくってきた。しかし、結局は箱づくりでしかなかったことに気がついた。文化施設は、中身が勝負だ。地域の人たちや訪れる人たちに活用され、愛される施設をつくろうと、たくさんのスタッフと共に夜を徹して企画や制作にいそしんだ。

七年の間に一〇以上の文化施設を作らせてもらった。どれも評判は上々だったが、思い入れがあるだけに、施設の完成とともに、メンテナンス以外の縁がなくなってしまうことが淋しかった。こうして、次第にジレンマに陥っていったのである。

冒頭での衝撃的な出会いの後、私はさっそく西表島に出かけた。

新月の夜、あかり一つない浦内川。満天の星が空に輝き、川面を照らす。水に写った星は瞬き、漂う船のリズムを取るように蛙が鳴いている。思わず、宇宙の果てはどうなっているんだろうと悩んだ子供の頃を思い出す。船は真っ暗闇のなか、迷うことなく進んでいく。地形も川の状態も周りの自然もすべて知り尽くしているのだ。船頭は浦内川で観光業を営む平良彰健氏。かつて川の中流にあった村で生まれ育った平良氏にとって、浦内の自然は体の一部だ。

故郷への想いを語るとき、彼はとろけるような笑顔になる。西表島のエコツーリズム協会の二代目会長（現在は副会長）として、自然だけではなく、島の芸能・文化を掘り起こしながら、これら資源の保全とそれを活かした観光による地域振興、そして子供たちの育成に取り組んでいる。まさにエコツーリズムを地でいく人である。他にも西表には、魅力的な人がたくさんいる。地域を愛し、エコツーリズムを通じた地域づくりに取り組んでいる人たちが。私は、しだいにエコツーリズムにのめり込んでいった。

数々の出会いと旅を経て、私の道は決まった。文化施設や観光施設に命を吹き込みたい。地域に生きる人たちが経済的にも精神的にも豊かになるような仕組みづくりのお手伝いをしたい。エコツーリズムという活動を通じて……。そして一年前、私は小さな会社を作った。夢を実現するために！

ひらき・りか●一九五九年、沖縄県那覇市生まれ。本名、比嘉梨香。(有)開(ひらき)代表取締役。エコツーリズム推進協議会沖縄支所長。エコツーリズムに関する調査・コンサルティング、コンベンションの企画運営等の仕事に携わる。

西表島：浦内川（撮影：平良彰健氏）